



巻 頭 言

クオ・ヴァディス、日本農業

(財)日本植物調節剤研究協会 理事 早 川 充
日産化学工業株式会社 顧問

先日、戦争末期に海軍経理学校でベッドを並べていた仲間の集りがあった。当然乍ら話題は当時のこととなる。食事は量は確保されているものの、ミソ汁の実の「竹の子」は殆んど「竹」と言うべきであったし、訓練と上級生のシゴキで下痢患者が続出した。一号生徒（最上級生）の話では余りに生徒の消耗が激しく、調べた結果、栄養失調が原因とされ、将来の主計士官の卵が栄養失調とは由々しき事と、それから休養時間や食事に注意が払われる様になったそうである。終戦となり帰郷してドングリまで喰べた食糧難を思うと、経理学校の食事は当時としては可成り上等の方だったと言うべきであろう。こうした話は仲供には全く理解の外と言うことで一致したことであった。

さて昨年の大冷害による「平成米騒動」である。収量平年比74%、大量の輸入が必要と発表された。国産米嗜好と輸入米入荷の遅れから、2月には米屋に行列の騒ぎとなった。人によっては石油ショック時のトイレトペーパー買溜事件よりもっと深刻であった様である。長年、減反が実施され、米は余る程あると信じていた人々にとっては晴天の霹靂であったかも知れない。それにしても騒ぎ過ぎである。果せるかな、4月に入り輸入米も潤沢となり、家々の買溜効果もあって、闇米相場も下って来たと言う。どうも我々日本人は、事が起ると極端に走る傾向があり、又オール・オア・ナッシング的思考に取付かれるらしい。もう少し冷静に情勢判断が

出来ぬものかと思う。同じことは、農業や食品の「安全」に対する対応についても言えるのではなかろうか。

それはさておき、稲作は日本農業の根幹であるに拘らず、大きな試練に直面している。国は謂ゆる「新政策」をスタートさせ、一方で米の部分解放が決った。昨年の兇作は農家の人手不足、高齢化も一因とされる。「新政策」では農業の担手の育成、農地の流動・集中化により、基幹農家の労働時間、収入を都市勤労者並みにすることが謳われ、魅力ある農業を目指している。この時に当って、米不足を味わされた国民は稲作に興味の眼を向け、その重要性を再認識したものと期待したい。水田の持つ多面的機能も科学的に立証されて来た。単に食糧問題として丈でなく、我々の生活全体にも拘る問題であることも理解してもらふチャンスである。長期的には世界人口増による食糧の逼迫は目に見えている。米ワールドウォッチ研究所の報告では、1人当りの穀物生産量は1984年をピークに93年迄に11%減少したそうである。食糧供給国米国も将来輸出余力を大巾に減ずると言う。この機会をとらえ、農業政策の具体的処方箋を是非、固めてもらい度いものである。その昔、農政の泰斗、東畑教授が日本農業の将来を憂え、「諸君、苦しみ給え」の言葉が頭から離れぬが、農業のお蔭を持って今日迄、生計を得て来た者として、日本農業が試練を乗り越え、力強い発展の一步を踏み出せることを願うや切である。